



# インベーション

SYDNEY KING 著

ストーリー  
SYDNEY KING

イラスト  
MARIANNA STRYCHOWSKA

編集  
CHLOE FRABONI

デザイン&アートディレクション  
COREY PETERSCHMIDT

クリエイティブ・コンサルタント  
JEFF CHAMBERLAIN, MIRANDA MOYER, NESSKAIN, DION ROGERS,  
JOSHI ZHANG

プロダクション  
BRIANNE MESSINA, CARLOS GARCIA RENTA, TAKAYUKI SHIMBO

スペシャル・サンクス  
VALERIE STONE

翻訳  
SACHI MORITO



Blizzard.com

© 2025 Blizzard Entertainment, Inc. BlizzardおよびBlizzard Entertainmentのロゴは、米国およびその他の国における Blizzard Entertainment, Inc.の商標または登録商標です。

Published by Blizzard Entertainment.

本作品はフィクションです。本作品に登場する名前、キャラクター、場所、出来事は、著者または作画者の想像による産物または架空のものです。実在する人物（存命中または故人）、出来事、団体、場所に類似するいかなる描写も、風刺的な意図はなく、偶然によるものです。

Blizzard Entertainmentは著者や第三者のウェブサイトもしくはそのコンテンツを管理しておらず、またそれらについて一切の責任を負いません。



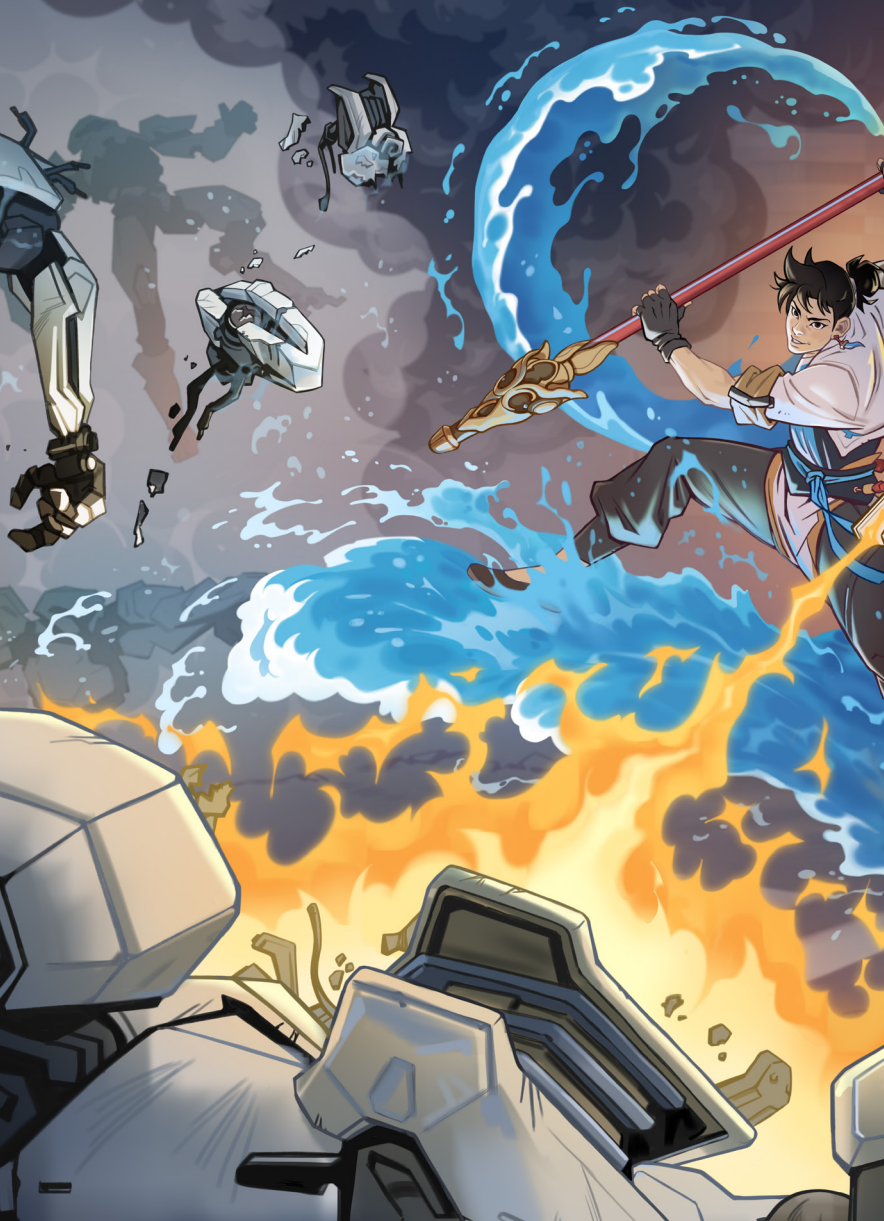
## インビテーション

静けさに満ちたオーバーウォッチのコマンド・センター。サーバーの動作音だけが低く唸るように響くその部屋のデスクに、ウィンストンは腰かけた。目元の眼鏡には、モニターの煌々とした光が反射している。彼がキーを叩くと、記録開始を告げる赤いライトが点滅した。

「たった一人の勇気が世界を変えるきっかけになる——この信念がオーバーウォッチの礎となり、オムニックス・クライシス下で人々を一つにしました。創設時のメンバーから現在の私たちに至る全員が、この一つの信念のもとに戦い続けています。

昔のオーバーウォッチは……完璧ではありませんでしたが、目指すものは今も変わっていません。人々を守ることが使命。だからこそ、私たちはヌルセクターの侵攻を受けて再集結したのです。

パリ、釜山、リオデジャネイロなどの世界各地で、マーシーやラインハルトなどのかつての戦友、そしてアレクサンドラ・ザリアノヴァ、ルシオ・コレイア・ドス・サントス、ハナ・ソングといった新たな仲間たちが招集に応じてくれました。自らの人生を二の次にしてジブラルタルへ来てくれた仲間には他にも大勢います。命令されたからではなく、それがやるべきことだと信じて。







国際司法委員会も当初、私たちの活動を認めませんでした。が、人類とオムニックの双方がオーバーウォッチを必要としていることを理解し、解散命令を保留しました。しかし、世界を救ったのはオーバーウォッチの力だけではありません。事態の収束とともに私たちが目にしたのは、兵士、科学者、そして並外れた勇気を持った一般市民——背景はそれぞれ違えど、世界を守るため立ち上がった皆さんの姿でした。

私も皆さんの侵攻下での勇敢な行動に、報告を通じてくまなく目を通しました。そして皆さんの中でも特に、力や才能だけでなく大きな勇気を持ち合わせているあなたへ、このバッジと内蔵メッセージをお送りします。これは次世代のヒーローであるあなたに宛てた、ウォッチポイント・ジブラルタルへの正式な招待状です。人々はまだ助けを必要としています。世界を変えられるのは私たちと、あなたの力です」

やがて、画面に記録の終了を尋ねるメッセージが浮かんだ。暗転したモニターに、疲れた様子のウィンストンが映る。

「はあ……ソジョーンはまだ国際司法委員会と交渉中ですか。ヌルセクターが撤退して、また解散の圧力がかかっているようですし……バッジを送ったことがバレたら、マズいことになりそうですね」

ウィンストンは脳内で規則や政治的事情について淡々と自分に説くソジョーンの姿を思い浮かべた。

「あの頃は、誰かが招集に応じてくれるかなんて知る由もありませんでした」

ウィンストンは通信機に独りごちた。

「何年も独りでここにいて、オーバーウォッチを去れずにいるのは自分だけだと思っていましたが、実際には呼びかけに応じてくれた皆さんも……同じく希望を持っていました。ヌルセクターと戦うには無謀な人数でしたが、これが正しい道だったと信じています」

ウィンストンはキーボードの上で指を彷徨させた後、自ら編集したオーバーウォッチの戦闘映像を再び開いた。懐かしいあの頃が思い出される。少なくとも記憶の中では、希望に満ちていた頃だ。

「ヌルセクターは撤退しましたが、まだ消えたわけではありません。他にどんな脅威が待ち受けているかもわからない。世界にはオーバーウォッチが必要です。今までも、そしてこれからも。それにソジョーンの場合、事前に許可を求めるよりも事後に許しを乞うに限りますからね……さて、やるだけやって

みましょう」

そう言うと、ウィンストンはキーを押した。確定を告げるメッセージが画面に浮かんだ。